



ラドラダの 秘宝を探せ下

クライブ・カッスラー 中山善之 訳

新潮文

Title : CYCLOPS : Vol. II

Author : Clive Cussler

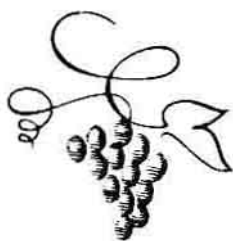
Copyright © 1986 by Clive Cussler

Japanese language paperback rights arranged with Cl
Enterprises Inc., % Peter Lampack Agency Inc., New
through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

ラドラダの秘宝を探せ(下)

新潮文庫

カ - 5 - 10



昭和六十二年十一月二十五日 発行
昭和六十三年一月十日 三刷

訳者 中山善之

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三三二六六五一一)
編集部(〇三三二六六五四四〇)

振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Yoshiyuki Nakayama 1987 Printed in Japan

ISBN4-10-217010-3 C0197

新 潮 文 庫

ラドラダの秘宝を探せ

下 巻

クライブ・カッスラー

中山善之訳



新 潮 社 版

3966

目次

第三部	セレノス八号……………	七
第四部	ゲテイスバーク号……………	一〇五
第五部	エイミイ・ビガロー号……………	二〇九
第六部	ユーレカ！ ラドラダ……………	三五七

解説 中山善之

フドラダの秘宝を探せ

下
卷

第三部

セレノス八号

一九八九年十月三〇日
ソ連邦カザフスタン

シベリアの太陽よりも明るい火の玉をとまって、セレノス八号は一一〇トンの有人月ステーションともども、肌寒^{はださむ}い青空へと昇っていった。七〇〇万キロの推力を持つスーパーロケットと補助用の四基のブースターは、長さ三〇〇メートル、幅九〇メートルの橙^{だいだいいろ}色がかった黄色い炎の尾を引いていた。白い煙が発射台の周辺に噴出し、エンジンの振動のせいで、二〇キロ近く離れていてもガラスが鳴った。はじめのうち、ひどく重々しい昇りかたなので、動いているとはおよそ思えなかった。やがて速度をまし、轟^{ごうおん}音を響かせて空へ昇っていった。ソ連のアントノフ書記長兼首相は装甲ガラスの掩蔽壕^{えんぺいごう}から、三脚に載せた大型双眼鏡ごしに、打ち上げを見守っていた。セルゲイ・コルニロフとエセーニン将軍が彼とならんで立つて、宇宙飛行士たちと宇宙コントロールセンターとの音声による通信を、熱心に聴取していた。

「感動的な光景だ」とアントノフがおごそかにつぶやいた。

「模範的な打ち上げ」とコルニロフがいった。「四分後に脱出速度に達します」

「万事うまくいつてるのか？」

「はい、同志首相。全機構が正常に機能しております。それに、正確に飛んでいます」

アントノフが炎の長い舌を見つめていると、ついには見えなくなった。そこではじめて溜息をもらすと、双眼鏡から離れた。「さて、諸君、この壮大な宇宙ショーに世界は目を奪われて、今度アメリカが新しい軌道ステーションへ送りだすシャトルフライトは、黙殺されよう」

エセーニンはどうも同意を表わし、コルニロフの肩を抑えた。

「おめでとう、セルゲイ。あんたはヤンキーの勝利を、ソ連邦へ盗み取ってきた」

「私の功績ではない」とコルニロフはいった。「軌道力学のおかげで、連中の打ちあげ予定時間より数時間前に打ちあげ可能な、都合のよい時間帯が、たまたま空いていることがわかったんだ」

アントノフは催眠術に掛かりでもしたように、空をじっと見つめていた。「アメリカの情報機関は、わがほうの宇宙飛行士たちが見掛け通りではないことを、嗅ぎつけてはいないはずだ」

「完全無欠な偽装」とエセーニンはぬけぬけといった。「宇宙科学者五名と特別の訓練を受けた兵士たちとの交替は、打ち上げ間近であつたがすんなりと運んだ」

「実験機器と兵器とを取り換える応急措置についても、おなじことがいえると申し分ないのだが」コルニロフが発言した。「実験中止になった科学者たちは、すんでのところで一騒動おこすところだった。それに技術者たちは、新しい重量と兵器の保管場所のためにステーション内部の設計のしなおしを命じられたわけだが、最後の最後になっての変更理由を教えてもらえないので怒ってしまった。彼らの不満は、まず間違いなく洩れるだろうよ」

「それを案じて寝不足にならんように」とエセーニンは声にだして笑った。「アメリカの宇宙関係者はなにも疑うものか。かけ替えのない月面基地との連絡が途絶えて、気づくのが落ちさ」

「わがほうの攻撃隊の責任者は誰だだれね？」とアントノフがきいた。

「グリゴリー・ルチェンコ少佐。ゲリラ戦の熟練者です。少佐はアフガニスタンで、反乱分子相手に数多く勝利を収めています。彼が忠実にして傑出した兵士であることは、私自身が保証いたします」

アントノフは考えこむようにうなずいた。「適切な選択だ、將軍。彼なら月面を、アフガニスタンの地表とさして変らない、ときつと思うことだろう」

「ルチェンコ少佐は、成功裡せいこうりに作戦を終えるに違いない」

「きみはアメリカの宇宙飛行士たちを忘れている、將軍」とコルニロフがいった。

「奴らやつらがどうだというのだね？」

「例の写真は、奴らもまた兵器を持っていることをはつきりと示している。奴らが自分たち

の施設を守るために強硬に戦う狂信の徒でないよう、私は祈っている」

エセーニンはにんまりと微笑^{ほほえ}んだ。「祈るだって、セルゲイ？ 誰に祈るんだね？ 神にではないことは確かだが。いったんルチェンコとその部下が攻撃を開始したら、神などアメリカ側の役にたたん。結果は端^{はな}からわかっている。科学者たちが、殺しの訓練を受けた職業軍人に太刀打ちできるわけがないのだ」

「奴らを甘く見ちゃいかん。それだけは、いっておく」

「いい加減にしろ！」アントノフが声を強めていった。「そんな敗北主義のごたくは、このうえ聞きたくない。ルチェンコ少佐は奇襲を加える強味に合わせて優れた武器を備えているので、二重に有利だ。これから六〇時間たらずして、宇宙をめぐる最初の本物の戦いが、はじまることになる。しかも私は、その戦いにソ連が敗れるとは思っていない」

モスクワでは、ウラジミール・ポレボイがジェルジンスキー街のKGB本部内の自分の机にむかって坐^{すわ}り、ベリコフ將軍からの報告を読んでいた。ライエフ・マイルスキーが部屋にずかずかと入ってきて、すすめられもしないのに腰を下ろしても、彼は顔をあげなかった。マイルスキーの顔は特徴がなく、間のびがしていて、その人柄^{ひとがら}に似て平面的であった。彼は第一総局の局長で、同局はKGBの海外活動を担当している。マイルスキーとポレボイの関係は控え目なものであったが、たがいに補足し合っていた。

やがてポレボイはマイルスキーを食い入るように見つめた。「説明を聞こうじゃないか」

「ラバロン夫妻がいよいよとは、思っていなかったのです」マイスキーは短く応じた。

「ラバロン夫人と宝捜しのためのクルーについては、まあいいとして、彼女の夫については、そんなことは絶対に通らない。なぜベリコフは彼をキューバ側から移管したのだね？」

「カストロを排除した後の、アメリカ国務省との交渉に、レイモンド・ラバロンが人質として役に立つのではないか、と將軍は考えたのです」

「よかれと思ってやったにしろ、危険なことになった」とポレボイはいった。

「ベリコフは私に請け合っています。ラバロンは嚴重な監視下において、偽にせの情報をあたえているそうです」

「ではあっても、ラバロンがサンタマリア島の本当の機能を知る恐れが、多少なりとも常にある」

「そのときには、あっさり消すだけです」

「で、ジェシー・ラバロンは？」

「私個人の考えですが、彼女とその友人たちは、われわれが計画している大惨事の責めをCIAに押しつける際に、替え玉として役に立つのではないでしょうか」

「ベリコフなりワシントンに潜んでいるエージェントは、アメリカの情報機関があの島への侵入計画を持っていることを、突きとめたのか？」

「ないようですよ」とマイスキーは答えた。「あの飛行船の乗組員について調べてみたのですが、目下のところCIAや軍ともいっさいつながりがありません」

「へまはいっさい、ごめんこうむる」とポレボイはきつい口調でいった。「成功を目前にしているんだ。私の言葉をベリコフに伝えてくれ」

「きつと指示いたします」

ドアをノックする音がして、ポレボイの秘書が入ってきた。一言もいわずに、彼女は一枚の紙をわたすと、部屋を出ていった。

にわかの怒りに、ポレボイは顔を朱く染めた。あか「くそめ！ 恐れがあるという間もあらばこそ、現実になった」

「どうしました？」

「ベリコフからの緊急連絡だ。例の囚人の一人が脱走した」

マイスキーは両手を神経質に動かした。「それはあり得ない。サンタマリア島には船は一隻もないのですよ。その男が馬鹿なやつで、泳ぐ気になったところで、溺れ死にするか鯨に食われるかだ。誰にしろ、遠くまでいけっこない」

「そいつはダーク・ピットという名だ。ベリコフにいわせると、危険きわまりない奴だそうだ」

「危険であろうとなかろうと――」

ポレボイは手をふって相手を黙らせると、強いいらだちを顔に浮かべて、絨緞のうえを行きつ戻りつはじめた。「予想外の事態に対応している暇などない。キューバ工作の最終期限を、一週間早めざるを得ない」

マイスキーは首をふり反対した。「船が時間内にハバナに着けつゝありません。同時に、祝典の日時を変えることもできません。フィデルとその政府の全高官は、演説会に出席する手筈てはずになっています。爆破のための手順は、動きだしています。段取りは変えようがありません。ラム・アンド・コーラ計画は、中止するか予定通りつづけるかのいずれかです」

ポレボイは決断しかねて、両手を組んではほどいていた。「ラム・アンド・コーラ。こんな大規模な工作にしては、馬鹿馬鹿しい名前だ」

「このまま押し切る、もう一つの理由。わがほうの偽情報工作はすでにはじまっております、CIAにキューバ政府壊滅の陰謀あり、との噂うわさを流しはじめています。ラム・アンド・コーラという成句は、まぎれもなくアメリカ的です。それがモスクワで計画されているなどと、疑ってかかる外国の政府などあり得ません」

ポレボイは肩をすくめて同意した。「よくわかった。しかし、このピットという男がなにかの奇蹟きせきで生きのびて、アメリカへもどったときにどんなことになるやら、考える気にもなれん」

「彼はすでに死んでますとも」とマイスキーはいい放った。「絶対に」

大統領はダニエル・フォーセットの部屋を覗きこんで、手をふった。「立ちあがらんでい

い。ちょっと知らせておこうと思ったただけなんだ。これから上の階にいったって、ワイフと落着いて昼飯を食べるつもりなんでね」

「情報機関の両長官やダグ・オーツと、四五分後に会議のあることをお忘れなく」とフォーセットは念を押した。

「時間厳守を約束する」

大統領はむきを変え、エレベーターに乗ってホワイトハウスの二階にある居住区へむかった。アイラ・ヘーゲンがリンカーン・スイートで、彼を待っていた。

「疲れているようだな、アイラ」

ヘーゲンは微笑^{ほほえ}んだ。「就寝時間が過ぎていゐるんで」

「現状はどうかね？」

「“中核”の構成員九名全員の身許^{みもと}を、突きとめた。七人は正確に。レナード・ハドスンとガナー・エリクスンだけは、いまだにその埒外^{らちがい}だが」

「ショッピングセンターから先の彼らの足取りを、つけることができなかったのだな？」

ヘーゲンはいいよんだ。「成果はまったくなし」

「ソ連の月ステーションは、八時間前に打ちあげられた」と大統領はいった。「このうえ遅滞は許されない。今日の午後には、“中核”の人間をできるだけ多く捕えるよう、命令がだされることになるう」

「陸軍それともFBI？」